

一宮市
博物館
だより

No.41 2008.1



山の道具 (ふるさと体験館さそぶくしま所蔵)



平野の道具 (一宮市博物館所蔵)



海の道具 (田原市渥美郷土資料館所蔵)
企画展「くらしの道具～今と昔～」より

くらしの道具—今と昔—

催し物のご案内

平成20年1月5日～2月24日

この展覧会は、歴史を学び始める小学生を対象に毎年開催し、今回で16回目となります。小学校4年生の教科書にある「きょうどにつたわるねがい～昔のくらし」と、「わたしたちの県」に登場する「海」「平地」「山」を、併せて学ぶことができる展示を目指しています。

そこで、平野に立地する一宮周辺の暮らしはもちろん、海や山の生活道具も展示し、子どもたちに自然環境による生活の違いについても学んでもらいます。

利便性を追及することによって変わってしまった現代の道具や人のくらしを、もう一度見直す機会になればと思います。



レクチャー

会期中には、市内の小学校4年生が全員来館します。

そして、まずはレクチャーを受けるのですが、その最後に必ずワラの刀づくりを体験します。



刀づくりを体験



ワラの刀とネジリカゴ

展覧会会場には、「クイズのこみち」があり、「ちゃぶ台が普及する前に使われていたお膳は何？」など、20問のクイズに答えながら、昔のくらしの道具について学ぶことができます。

■会期中の催し物

ミニ講座「平野の道具を使ってみよう！～綿繰ロクロと糸車編～」
1/6(日) 綿繰ロクロという道具を使って、綿の束から種を取り綿打ちをします。さらに、糸車を使って綿から糸をつむぎます。

ミニ講座「平野の道具を使ってみよう！～農具編～」
2/3(日) カラサオやアブチ(唐箕)、マンガ(千歯扱き)など、機械化する前の農具を使ってみます。

ミニ講座「ムギワラでネジリカゴをつくらう！」
1/13(日) ムギワラをねじるように編み、カゴを作ります。昔は、ホタルを入れておく虫かごにしたり、クワの実を入れたりしました。

ミニ講座「昔の遊びを体験しよう！」
2/10(日) 石けりやグイチ(お手玉)、すごろくなどで遊びます。

海のくらしを体験！「南知多町日間賀島」
1/20(日) 日間賀島のみなさんから、海辺の暮らしや漁業のお話を聞きます。さらに、タクめし・シラスめし・ゴンドウ汁(雑魚くどこが入ったみそ汁)など、海の幸を味わってみよう！

ミニ講座「ワラで刀を作らう！」
2/17(日) 一宮の小学生に大人気のワラで作る刀。たった1本のワラで、どうやって作るのでしょうか？

山のくらしを体験！「木曾町黒川」
1/27(日) 木曾川上流地域の山の暮らしのお話を聞きます。さらに、ゴヘイモチやヘーモチ、ホウバメンなど、一宮にはない味を体験してみよう！

ミニ講座「平野の道具を使ってみよう！～食の道具編～」
2/24(日) クド(カマド)で炊いたご飯は、とてもおいしいものです。さらに、昔はおやつとしてよく食べたセンバヤキも、試食できます。



クイズのこみち



中学生職場体験

夏休みから秋にかけて、今年も職場体験のために中学生が博物館にやってきました。大和中学校、中部中学校、尾西第一中学校、萩原中学校、西成中学校、葉栗中学校、南部中学校の7校20人のみなさんでした。

博物館の仕事は、大きく分けると管理部門と学芸部門になりますが、受付・展覧会会場の監視から始まり、備品管理や博物館の動脈である機械室の見学、展示室の清掃、そして民俗資料や古文書の整理、パネルづくりなどさまざまな仕事に挑戦してもらいました。

感想文の中には、「・・・古文書整理では、ミミズのはったような字を解読したものをパソコンに入力する大変な作業でした。」「博物館は、物を集めることが好きで、好奇心が多く、細かいことが好きで、変な人が多い・・・」など確信をつくものもあり、進路の参考になったのではと思いました。



大和中学校のみなさん
(資料の整理)



中部中学校のみなさん
(子ども講座の補助)

小学校6年生のための歴史授業

博物館では平成16年度から「小学校6年生対象 博物館学芸員による歴史の授業」として、アウトリーチ活動を行ってきました。この活動は、博物館に収蔵されている数多くの貴重な歴史資料(実物資料・復元資料)を活用しながら、子どもたちの歴史学習に対する関心・意欲を高めてもらうとともに、博物館が子どもたちにとってより身近な存在になることを望んで実施しています。テーマは「土器から見た人々の歴史」「むら」と「まち」から見た人々の歴史」「旅から見た歴史」「生活道具から見た人々の歴史」で実施してきましたが、今年度からは、江戸時代の人々の歴史に焦点をあてた「三八市から見た人々の歴史」を始めました。

夏休みには、市内大和西小学校の地域学習と連携し、授業と展示をセットにした「夏休み子ども展示 地域の歴史を調べよう～苡安賀村～」も開催しました。



宮西小学校での授業風景
「三八市から見た人々の歴史」



大和西小学校での授業風景
「地域の歴史を調べよう～苡安賀村～」

これまでの博物館

博物館では4月～10月にかけて、5つの展覧会をはじめ、1年間を通じて活動している3つの講座を開催してきました。

■展覧会■

企画展

杉本健吉 遺贈記念作品展

4・28～5・27

杉本健吉は、明治38年（一九〇五）生まれ。幾つかの受賞がありますが、二宮との関連では、昭和18年（一九四三）に「佐分賞」（宮ゆかりの画家佐分眞の没年に遺族の資金により設定された）を受賞しました。昭和25年（一九五〇）より吉川英治の連載小説「新平家物語」の挿絵を手がけ、挿絵画家としても全国的な評判も得て、その人気を不動のものとなりました。その後にも絵画・図案など、活躍は多岐にわたります。

平成16年（二〇〇四）、98歳で亡くなりますが、その年に遺族のご好意により一宮市博物館に54点もの寄贈をいただきました。今回は、寄贈作品すべてを紹介し、素描・墨彩画、油彩画など瑞々しく、生命感に溢れた味わい深い作品を数多く展示し、多くの方々にご鑑賞いただきました。



企画展

一宮市子ども写生大会作品展

8・11～8・22

一宮市内の幼稚園・保育園児、小中学生の絵画作品を展示しました。この作品展は、毎年、感性あふれる、すばらしい作品を数多く生み出してきた「一宮市子ども写生大会」（一宮市児童写生大会より改称）での上位入賞作品と代表作品を展示したものです。多くの子ども達の参加を得て、充実した内容となり訪れた人々の目を楽しませてくれました。



2007 一宮美術作家新展

9・11～9・17

一宮美術作家協会47人による、最新の発想でイメージの試作を展開した力作56点を展示しました。絵画・平面、彫塑・立体、デザイン、工芸と多彩な作家の個性豊かなそれぞれの作風を楽しむことができました。



一宮写真協会28人写真展

9・20～9・30

一宮写真協会より選ばれた28人による写真展「出会い、感動この時を撮る。」をテーマに感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた作品86点を展示しました。モノクロ、カラーともに印象深く力作ぞろいでした。



特別陳列

妙興寺文化財展

10・6～10・14

本年の秋は、妙興寺にとって重要な人物である大応国師没後七〇〇年・南化国師没後四〇年の大法会が営まれました。妙興寺境内地の二隅にある一宮市博物館ではそれを記念して、戦乱や荒廃の危機を乗り越えて伝来してきた寺宝のうち、勸請開山大応国師・創建開山大照禪師・中興開山南化玄興を中心として肖像画・肖像彫刻・袈裟・墨蹟など31点を展示しました。なかでも、寺外で初公開となる木造大応国師坐像（重要文化財）、創建開山大照禪師坐像（一宮市指定文化財）の二棟の等身大ともいえるような大きな坐像の迫力に、皆さん驚かされていたようでした。なかには、坐像を見るために二度、三度足を運ぶ方もいらっしゃいました。



講座（通年）

第十六回古文書講座

今年度の古文書講座では、時之嶋村大野家文書をテキストとして使用しています。大野家は、村全体の惣庄屋を勤めただけでなく、複数の給人の組庄屋も勤めました。これまでに旧丹羽郡時之嶋村の村絵図や往来手形などの様々な証書類、内済取扱人として活躍した大野勘三郎の留書などを通して、古文書の読解と江戸時代の人々の暮らしや生活文化を学びました。



ミュージアムキッズクラブ

平成18年度から小学校4年生～6年生を対象に、歴史や自然を学びながら博物館活動に参加するミュージアムキッズクラブを始めました。今年度も、「織物の歴史と実技」「骨の見方・標本の作り方」「江戸時代の商人と抹茶づくり」「自然観察会（昆虫標本・植物標本を作る）」など、幅広い内容でさまざまな分野を学んできました。



一宮の遺跡と遺物

一宮市博物館(一宮市教育委員会)は、平成18年度に愛知県教育委員会より、愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した遺跡の出土資料の譲与を受けました。それを受け、平成19年7月7日(土)から8月26日(日)まで、新収蔵品展「発掘された一宮」を開催しました。



新収蔵資料出土遺跡とその概要

北道手遺跡	大字光明寺地内に位置する。平成5・6年の発掘調査で、古墳時代前期の土坑や溝などが確認されている。また、古代・中世の遺構遺物も検出されている。
田所遺跡	現在の田所集落を囲むと推定される大溝と、中世の墳墓堂と呼ばれる遺構が見つかった。この大溝は、幅が6m以上ある。また、皇朝十二銭の一つである「富壽神寶」も見つかった。
大毛池田遺跡	この遺跡では「美濃」施印須恵器や緑釉碗が発見されており、古代東濃郡域の中心地帯とも推定される。また、古墳時代の水田跡も見つかり、米の生産に適した土地であったことがわかる。
大毛沖遺跡	遺跡のほぼ中央部を流れる自然流路で、古代の護岸施設が確認され、当時の河川工事の技術を知ることができた。また、鏝をはじめ木製品が数多く遺されていた。
門岡沼遺跡	弥生時代から古墳時代、古代、中世の遺構遺物が確認されている。また、古墳時代の水田跡が検出されるとともに、古墳時代の琴形木製品が出土している。
西上免遺跡	今伊勢町と開明地内にまたがるこの遺跡では、古墳時代初期の前方後方墳が検出されている。尾張平野の発生期の古墳の一つとも考えられ、東方800mに位置する今伊勢古墳群との関連も注目される。
東新規道遺跡	開明地内のこの遺跡では、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が検出されている。
東刈安賀道遺跡	開明地内のこの遺跡では、縄文時代、古墳時代、中世の遺構・遺物が検出されている。
馬引横手遺跡	溝によって区画された、中世の集落跡と考えられる遺構が検出されている。東方500mの地点には、法園寺中世墓(2階常設展示参照)があり、関連が注目される。
毛受遺跡	戦国時代に掘削された居館を巡る堀と考えられる大溝や、屋敷地を区画する区画溝などが検出されている。
八王子遺跡	弥生時代前期から古墳時代、古代、中世と継続的に人が居住していたことが知られる。また、倒立して埋納された銅鐸の発見や、古墳時代の大規模な建物跡と井泉祭祀の場が見つかったこと、この地域が当時の中心地域であったことがわかる。
山中遺跡	県立尾張病院(現在は循環器呼吸器病センター)構内にある遺跡。ハレススタイル土器が出土したことで知られる。弥生時代後期の土器形式:「山中式」の名称の由来ともなった標識遺跡である。5回にわたって発掘調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の水田や古代・中世の遺構が検出されている。
刈安賀遺跡	戦国時代から近世にかけての遺構や遺物、特に刈安賀城の堀と考えられる大溝や、巡見街道に沿った町屋の遺構が検出され、注目されている。

この展示は、平成18年度に愛知県教育委員会より、一宮市内で愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した18遺跡の出土資料の譲与を受けましたが、その膨大な資料の一部を利用したミニ展示としました。今回、譲与された資料は、コンテナ等で三〇〇〇箱を越えています。その中には、銅鐸をはじめとする八王子遺跡出土遺物など、学術的・歴史的に貴重な第一級の資料が数多く含まれています。

まず、展示ホールには、八王子遺跡から出土した銅鐸を、埋納状況のジオラマとともに展示することができますようにしました。小さな土坑に倒立埋納されていた八王子銅鐸は、みなさんに何を語りかけてくれるのでしょうか。

その他、展示した資料は、三ツ井遺跡出土の縄文時代後期の深鉢形土器や、環濠集落である猫島遺跡の環濠から出土した土器、八王子遺跡出土の古墳時代の井泉の祭祀に伴う精製土師器群、そして西上免遺跡の前方後方墳の周濠から出土した土師器群などを中心に、猫島遺跡出土の人面土器や、練刻の施された土器など、当時の人々の様子が伺うことのできる土製品があります。

愛知県埋蔵文化財センターの発掘調査は、一九八七年から二〇〇七年までに宮市内で、20ヶ所にのぼる遺跡の発掘調査を行っています。調査の契機は、高速道路建設に伴う事前調査や、県施設の建替えに伴う調査など様々ですが、これらの発掘調査により、一宮市を中心とする尾張平野周辺の歴史が大きく書かれています。



また、木製品では、八王子遺跡で出土した古墳時代前期の祭祀用の多数の木製品(槽・剣形・鳥形)や、門岡沼遺跡出土の古墳時代の琴形木製品、大毛池田遺跡出土の古代の木製鏝(あぶみ)、そして大毛池田遺跡出土の中世の卒塔婆(そとば)など貴重な資料が多くあります。

さらに、石製品・金属製品では、猫島遺跡出土の弥生時代の石鏝をはじめ、田所遺跡と西上免遺跡出土の古墳時代の多孔銅鏝をはじめとする銅鏝など、材質の違う道具の変遷をたどることのできる展示とすることができました。

き換えられたものもあります。今後は、博物館の常設展示の中でも、これらの新収蔵資料を生かしながら、新たに得られた知見を反映させていくことが必要と考えています。

(土本典生)

南木戸遺跡	名神高速道路建設時に発見された遺跡で、古墳時代前期の集落遺跡と考えられていた。平成15年の調査で、古墳時代の堅穴住居11棟と堀立柱建物2棟が確認されるとともに、古代・中世の遺構・遺物も検出されている。
島崎遺跡	この遺跡は、中世の集落跡と考えられている。平成13年の発掘調査で、溝、土坑、井戸などの遺構が検出されている。
猫島遺跡	弥生時代中期の環濠集落遺跡で、住居跡や方形周溝墓、水田跡などがみつかった。弥生時代の人々の生活を知ることができる。
三ツ井遺跡	縄文時代後期の土器が発見され、以後弥生時代・古代・中世の遺構・遺物が検出されている。また、島畑景観の形成が、中世後半以降であることが確認された点は興味深い。
伝法寺本郷遺跡	平成13年の発掘調査で確認された遺跡。古代・中世の集落遺跡。さらに、古墳時代の水田跡も発見されている。



お鍬さまと「御くわ祭り入用帳」

博物館収蔵のお鍬祭り関係資料

平成十九年（二〇〇七）は、お鍬祭りが行われる年です。この祭りは、六〇年に一度の周期で行われてきました。

お鍬祭りは、伊勢神宮の山に鍬形の神が生えたことを豊年の吉兆として流行し、お鍬さま（鍬神）を村ごとに行列して継ぎ送り、五穀豊穡を祈願した祭礼です。村々では、様々な作り物や衣装を用意して大変賑わったようです。

そこで今回は、博物館に収蔵されるお鍬祭りに関する資料を2点紹介したいと思います。

尾張のお鍬祭りは、天和二年（一六八二）、元禄十六年（一七〇三）、明和四年（一七六七）、文政十年（一八二七）、安政六年（一八五九）、明治二年（一八八八）、昭和三年（一九四七）に流行し、行われてきました。

博物館に収蔵されているお鍬さまは、平成八年（一九九六）に市内千秋町芝原町内会から寄贈を受けたものです。もとは同町内にある生田神社に奉納されていたもので、昭和二年に行われたお鍬祭りです。使用されました。お鍬さまの大きさは、高二六cm、幅二二cm、長一八cmです。

一方、昭和四九年（一九七四）に寄贈を受けた市内萩原町加藤家の文書群中には、「御くわ祭り入用帳」という史料があります。当史料は、文政十年八月、築込村（現宮市萩原町）で行われたお鍬祭りに際し、必要となつた物などの入用金額が書き上げられた帳面です。全文については、『新編宮市史資料編十』に釈文が掲載されていますので、そちらを参照していただきたいと思います。この帳面は、表紙・裏表紙とも全六丁の横帳で、

表紙に、
「文政十年 築込村

おくわ祭り入用帳

亥八月廿九日 氏子中」とあります。

本文中には、

一 十式文

御祭り二拵物之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

御祭り日限之触

一 十式文

ました。しかし、祭りの当日、北方代官所の役人が出張し、華美な演出を禁止したため、祭りはやや縮小して行われました。それでも祭りは、朝から暮れまで大賑わいで、この月の三八市には普段以上の人手があつたということです。また、荻安賀村でも文政十年、安政六年にお鍬祭りが行われました。

「荻安賀村御鍬祭り記録」（『新編宮市史資料編十』所収）によると、文政十年の祭りでは、先の一宮村の場合もそうであつたようですが、「伊勢太夫より当年（文政十年）者御鍬祭り候、村々廻章村次二廻り候事」と、伊勢神宮の御師がお鍬祭りに大きく関わつていたことがわかります。

村では、「庄屋二而組頭中祭懸り道具圖取成」と町組ごとに「鍬」「舂」「斗かき」「鎌」などの祭りに関する諸道具をくじ引きで決定し、相談の上で祭りを九月十五日に執行することを決めました。この年の各町組から出される作り物の多くは縮緬のふきぬきやのぼりですが、中には大黒天と俵の作り物を馬に載せたものもあつたようです。

安政六年十一月八日に行われた祭りでは、「三月頃北方より御触参り、一宮村速水辰助シマリ方被仰付候」と、すでに三月の段階で北方代官所から祭りの締役任命に関する触が廻つていた事がわかります。村では、「十一月七日御陣屋へ御願ひ二参り、七日二日休日」と、北方代官所へ祭りの願ひを出し、七日は二日休日となりました。そしてその夜、「家浪二灯燈ヲ出し、組々より寺社へ灯燈三而参り候」と、祭りは当初比較的地味に行われる予定であつたようです。しかし、荻安賀村内各町の「組々より御鍬祭りヲ是で八先年のかくと、八間違候間、先年之通り仕度様組頭願ひ参り」との要望があつた

め、北方陣屋へ再度願をし、八日昼後に作り物を作ることとなりました。

各町組では、「大キ成儀三俵作り、其上二大キ成鯛作り之せ」た物や「花車ヲ出し、其上二七福神」を飾つた物、「白紅のキヌ二而フキヌキ又ハ紙のハタ」「大キ成み鎌鍬等」「作り物のみこし」など、様々な種類の作り物を作成しています。そして、各町ではそれぞれの作り物を持ち歩き、村中を巡行しました。

荻安賀村では、この年、村内の八幡宮で相撲興行も行われ、また、庄屋からは酒も振舞われ、当日は「大ニ干あひ」となりました。

参考文献

『御鍬祭真景図略』名古屋博物館資料叢書3 名古屋博物館編 二〇〇四年

『御鍬祭真景図略』名古屋博物館資料叢書3 名古屋博物館編 二〇〇五年

『ええじやないかの不思議―信仰と娯楽のあいだ』名古屋博物館編 二〇〇六年

（附記）貴重な資料を御寄贈いただいた方々にここで改めてお礼を申し上げます。（坪内淳仁）

安政六年十一月八日に行われた祭りでは、

「三月頃北方より御触参り、一宮村速水辰助シマリ方被仰付候」と、すでに三月の段階で北方代官所から祭りの締役任命に関する触が廻つていた事がわかります。村では、「十一月七日御陣屋へ御願ひ二参り、七日二日休日」と、北方代官所へ祭りの願ひを出し、七日は二日休日となりました。そしてその夜、「家浪二灯燈ヲ出し、組々より寺社へ灯燈三而参り候」と、祭りは当初比較的地味に行われる予定であつたようです。しかし、荻安賀村内各町の「組々より御鍬祭りヲ是で八先年のかくと、八間違候間、先年之通り仕度様組頭願ひ参り」との要望があつた

め、北方陣屋へ再度願をし、八日昼後に作り物を作ることとなりました。

各町組では、「大キ成儀三俵作り、其上二大キ成鯛作り之せ」た物や「花車ヲ出し、其上二七福神」を飾つた物、「白紅のキヌ二而フキヌキ又ハ紙のハタ」「大キ成み鎌鍬等」「作り物のみこし」など、様々な種類の作り物を作成しています。そして、各町ではそれぞれの作り物を持ち歩き、村中を巡行しました。

荻安賀村では、この年、村内の八幡宮で相撲興行も行われ、また、庄屋からは酒も振舞われ、当日は「大ニ干あひ」となりました。

参考文献

『御鍬祭真景図略』名古屋博物館資料叢書3 名古屋博物館編 二〇〇四年

『御鍬祭真景図略』名古屋博物館資料叢書3 名古屋博物館編 二〇〇五年

『ええじやないかの不思議―信仰と娯楽のあいだ』名古屋博物館編 二〇〇六年



博物館収蔵のお鍬さまと「御くわ祭り入用帳」

市域の文化財を守る

文化財は、私たちに郷土のゆたかな歴史や様々な文化を教え、伝えてくれる大切な資料です。先人から受け継がれてきたこれらの文化財を守り、後世に残していくために、一宮市では文化財の指定を行ったり、指定文化財の管理、修理等の保存活用に要する経費の一部を一宮市文化財保護条例に基づき補助金を交付する等の保護活動をしています。

ここでは平成18年度に保存修理を行なった文化財の中から、その結果の一端を紹介します。

大応国師塔銘牌

(県指定文化財・妙興寺蔵)

大応国師(南浦紹明)の塔銘(死者を追慕する塔に刻まれた文書)を刻んだ衝立状の牌。牌の表面には、国師の伝が陰刻され裏面の陰刻により、享徳二年(一四五三)に妙興寺二七世住持の無隠徳吾が造立し、四世のちの真亮が刻んだものと分かる。

大応国師は駿河国安倍郡(現静岡市)の生まれで、鎌倉建長寺一三世住持。臨済宗諸派の法系譜の基となる高僧。妙興寺を創建した大照禅師(滅宗宗興)は南浦の牌塔嗣法(師の墓に拝礼して弟子になること)の徒である。創建にあたり滅宗は、自らの師を勧請開山に仰いだ。滅宗自身は創建開山と呼ばれる。

牌は縦一材で、黒漆塗り。文字は陰刻され、文様は線刻。その谷間には白色顔料が塗られ、縁の圈帯部には唐草文様と牌の上部に左右一対の龍の線刻が見える。架台は横一材で、牌本体が差し込まれ、二本の棧木で「キ」の字型にする。架台を含んだ高さは一五二・五cm、牌の幅は四六・五cm。架台は最長が八九・七cm、棧木の奥が五八・五cm。



平成18年度に

愛知県費補助金

の交付も合わせ
て受け、京都市
の財団法人美術
院にて保存修理
を行なった。

牌の中央部に
大きな干割れが



生じていたため、上部の隙間に桧材の薄板を差込み安定をはかった。干割れに沿う黒漆層の帯状の剥落、龍文及び唐草文に沿う黒漆層の剥落は、これ以上損傷が進行しないよう剥落止めを施した。架台を中心にして著しい虫触があつたが、アクリル樹脂で材質強化し、虫触孔には桧材や漆木屑やマイクロナールン樹脂十砥の粉系樹脂十木粉、ブチラール樹脂十砥の粉十顔料等を注入し安定をはかった。架台及び棧木の可能な部分は黒漆塗りや朱漆塗りを施した。牌の下方干割れ部に後世の補修により薬研彫りが施されていたため桧材・漆木屑で補修した。また牌の裏面に養生紙が残っていたため、精製水を用いて可能な限り除去した。虫触により牌の架台への差込みが緩くなり不安定であつたので、差込み部に桧材の薄板を貼付け垂直に立つようにし、棧木との組付けを修整し安定させた。架台部の解体により、当初材の棧木と架台にそれぞれ印があり、それを合わせると修理前には左右が異なつて差し込まれていたことが判明し当初の形に戻した。もう片方の後補の棧木はそのまま生かし、虫触を修整し、

漆塗りを施した。なお、以上の修理箇所全
ては古色仕上げとした。

木造雨宝童子像

(市指定文化財・神明社蔵)

頭上に五輪塔を戴き、髪を総髪にして襟元でたわませる。盤領の袍を着け、胸前で左手を構え、掌の上に宝珠を持ち、右手は掌を伏せ、五指を軽く握り金剛宝棒を執る。両袖を長く垂らし、杳を履き直立する。詳しくは、金剛赤精善神雨宝童子とい、天照大神が日向に光臨した姿をあらわしたもので大日如来の化身とされている。神仏習合により日本で生まれた尊像である。

像は桧材の一木造、白下地彩色仕上げ。五輪塔及び両手首先・持物は別材。宝珠・宝棒は桧材、白下地金箔仕上げ。像高(五輪塔除く)四七・七cm。

保存修理は京都市の財団法人美術院にて施行された。

像全体に彩色が浮き上がり、剥離・剥落が見られたためメチルセルロースで剥落止めを行なった。頭上の五輪塔は、形状不適合のため桧材で新補し、漆箔を施し取



り付けた。また、宝珠・宝棒ともに脱落し、宝棒は下端部が亡失していた。双方とも形状不適合であるために松材で新補し漆箔を施し、それぞれの手に収めた。旧の五輪塔・宝珠・宝棒とも別保存とした。髪及び髪際の黒彩色及び面相部の彩色に明治修理時の補彩があり、その補彩部に浮き上がりが生じていたので、明治期の補彩を除去し、新たに補彩した。両手首先が脱落し、両手とも指に折損があり、漆にて指の接合を行い両手首先も元の位置に接合した。台は旧のままだと不安定であったので松材の方座を新補し、像の安定をは



かった。輪光背は矧ぎ目が切れ、解体状態であったので漆にて接合した。光背の柄は、輪光の下一方を残し、像の背中に打ち付けられていたため、像から取り外し、下方を接ぎ足して新補方座より立たせた。なお、以上の修理箇所全ては古色仕上げとした。

木造阿弥陀如来立像

(市指定文化財・長誓寺蔵)

長誓寺の本尊で、左手は下げて掌を前に向け、右手は前に上げて、肘を下げ前に屈して掌を前にする。両手とも第一指、二指を捻じて上品下生の来迎印をとる。衲衣は両肩を覆う通肩にし、両脚を揃えて直立する。寺伝によれば、長誓寺の南に経塚があり、鎌倉期の太子堂に安置されていたという。また、像の表面の破損は、天明年(一七八五)七月八日に落雷による本堂全焼の折に損害を被ったものと伝わる。像は松材の寄木造、漆箔。彫眼。肉髻朱・白毫は水晶。頭部と体部は別木の差首とする。頭部は前後に割矧ぎとし内割りが施される。体部は袖を含む左右の腕部をそれぞれ割矧ぎとし、さらに肩の線で前

後に割矧ぎ、内割りを施す。右袖は袖の内側を一旦割り離し、垂れた部分の内側を彫る。両手首、両足の甲から先を矧付け、左右の耳朶、右前腕の下半分は別材とする。台座は、九重蓮華座で松材の寄木造り、漆箔、彩色。光背は、放射光背で松材の寄木造り、漆箔、彩色。双方とも後補。像高六三cm。

保存修理は尾張旭市の愛知仏像修復工房にて施行された。手首・足先や右側部材等の矧目が緩んでいたため、はずせる部分は解体し、釘・鋸を除去。矧目の膠を清掃の上麦漆で接合。なお、体部の前後矧ぎの部分の接合は、健全であったため現状のままとした。

肉身部には、後補と考えられる漆箔層が何層にも塗り重ねられていたため、できる限り除去した。当初部分と考えられる漆箔層にはアクリル樹脂を浸透させ剥落防止を施した。衣部分表面の漆箔は後補であり、全体に浮き上がりが見られ、特に肩の接合部や割首の部分など矧目に沿って剥離していた。衣部の漆箔はアクリル樹脂を浸透させて剥落防止をし、矧に沿って割れた部分には新たに下地を行い周囲に合わせて整形した。鼻・両耳朶・両

手首は後世の修理により位置がずれていたため、正しい位置に戻した。両手指先は別材を継ぎ足し長く伸ばされ、両足の甲から先も大きさ・形状とも不適合である。そのため、両手指先から後補部をはずし整形し、足先は松材で新補した。両袖の下端・左右裳先などに鼠害等による欠損があり、錆漆で形状を整えた。台座と像のホゾが合っており不安定であったので、足部の裏と台座の接合面を整え、ホゾ穴に詰め物を施して像の安定をはかった。また、台座・光背についても適宜、保存修理を施した。なお、以上の修理箇所全ては古色仕上げとした。

主な参考・引用文献

- 『各修理解説書』
- 一宮市教育委員会『一宮の文化財めぐり 増補改訂版』一九九〇
- 二〇〇五
- 尾西市教育委員会『尾西市の文化財』一九九一
- 佐和隆研編『仏像辞典 増補版』二九九〇
- 關信子・山崎孝之編『山溪カラー名鑑 仏像』二〇〇六
- 津田徹英『日本の美術 No.442 中世の童子形』二〇〇三
- 光森正士『日本の美術 No.241 阿弥陀如来像』一九八六 他



これからの博物館

展覧会

企画展

くらしの道具「今と昔」

1.5～2.24

市域における衣・食・住に関する民俗資料をはじめ、木曽川上流の山間部で使われていた生活道具、知多半島・渥美半島で使われていた生活道具を展示し、自然環境の違いによる道具を比較します。



作品展

第19回

手つむぎ・染め・織り展

3.2～3.16

繊維講座の生徒と卒業生(伝承会員)による、19回目の作品発表会。手つむぎ・染色・機織りなど多くの工程を経て製作された木綿の作品を展示します。



講座

尾張平野を語る1・2

2月3日～3月2日の毎週日曜日

この講座では、歴史のみならず自然環境や民俗文化など幅広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野―特に尾張平野についてこれまでも考えてきました。

十二回目となる今回は、焼き物を通史的にとらえ、尾張の伝統文化に与えた影響やその歴史的特徴について考えます。

- 平成20年2月3日(日)「日本人と焼きもの」
愛知県陶磁資料館 学芸部長 仲野泰裕氏
- 平成20年2月10日(日)「古代の焼き物」
愛知県陶磁資料館 学芸員 小川裕紀氏
- 平成20年2月17日(日)「中世陶器の生産と流通」
愛知県陶磁資料館 学芸課長 井上喜久男氏
- 平成20年2月24日(日)「尾張の茶の湯」
愛知県陶磁資料館 主任学芸員 神崎かず子氏
- 平成20年3月2日(日)
於：愛知県陶磁資料館
○「近現代の焼き物」
愛知県陶磁資料館 学芸員 佐藤信氏
○「焼き物の科学」
愛知県陶磁資料館 学芸員 田村哲氏
○作陶の実習(陶芸館)

土器をつくらう

3月1日(土)2日(日)16日(日)

粘土を使って土器を作り、焼成する講座です。3月1日は土器の歴史や作り方を学び、3月2日に実際に粘土で製作、3月16日に焼成します。

民俗芸能公演

3月23日(日)

博物館では、市域に伝わり、現在でも活動を続け継承されている無形(民俗)文化財の公演を推進しています。特に今年度は、愛知県主催ふると遺産サポート事業「民俗芸能感動体験ゆめ授業」に島文楽が応募し、葉栗小学校で体験を伴う普及活動を行いました。宮後住吉踊も今伊勢西小学校で公演するなど、地元の小中学校で積極的な伝承活動を行っています。

博物館でも、この二つの芸能を紹介をします。



編集後記

11月になると、博物館の敷地の木々が黄色や赤色に色づき、遠いところに出かけなくても紅葉を楽しむことができました。



一宮市博物館だより

No.41 2008.1

発行日 平成20年1月5日
編集・発行 一宮市博物館
印刷 クイックス

利用案内

【観覧料】(常設展・聴講料含む、特別展の場合は別途定める)

一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)

小中生=50円(40円) *()は20人以上の団体料金

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始(12/28～1/4)

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※市内の小・中学生は無料(ただし、特別展期間中は除く)

※市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関

発行の証明書等を提示された方は無料

※身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

【HP】<http://www.icm-jp.com/>



一宮市博物館

〒491-0922 一宮市大和町妙興寺2390

TEL 0586-46-3215 FAX 0586-46-3216

【交通】名鉄名古屋本線「妙興寺」駅南口下車徒歩7分